

学校名：厚木市立相川中学校

担当：英語

氏名：松田 典子

1. 今回の研修における目的やねらい

今回の研修における目的やねらいは下記の3点であった。

1つ目は、自分自身の目で見て肌で感じた経験をもとに、生徒にカンボジアの現状を伝え「カンボジア」を通して世界の国々と日本とのつながりを知るきっかけを与える。そして生徒と共に、自分達に出来ることは何かを考えていく。

2つ目は、カンボジアで活躍する人々の活動内容や、その活動に対する思い（やりがいや難しさ）を伺い、生徒に伝えることで、少しでも生徒の視野を広げるきっかけを与える。

3つめは「国際理解教育」の担当者として、各教科・道徳・学活や総合的な学習の時間で、自らの体験を授業で組み込みながら実践し、広めていく。

2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

10日間という限られた時間であったが、十分な情報収集が出来た。

同じ参加者の先生方と事前にアンケート内容を協議したこと、通訳の方に言語面において大いに助けていただいたこと、そして写真や資料の共有ができ、予想以上の収穫につながった。

これから、今ある膨大な情報をどのようにして生徒に伝えていくのが私の課題である。

3. カンボジア国から学んだこと

研修前は「地雷」「貧困」「内戦」という暗いイメージを持っていた。確かに悲しい過去の歴史があり、教育や社会の課題は残っているが、豊富な食材、人々の笑顔、優しさ、そして目を輝かせて授業を受ける子供たちの姿が今では強く印象に残っている。

また、各国の援助を受けながら復興・開発が進んでいることも知った。しかし援助の中には必ずしもプラスになる援助だけではなかった例も聞くことが出来た。この10日間の研修で、本当に必要とする援助は「自立」に向けて、継続的な活動の輪を広げることだと感じた。

カンボジアの現状から、教育がいかに重要なのかを再認識すると共に、一人でも多くの生徒が世界に目を向け、「自立」の一歩を踏み出すきっかけを与えることこそが教育現場にいる私達の職責でもあるとつくづく感じている。

カンボジアで出会った人々、そしてこの研修を企画して下さった JICA スタッフの皆様に感謝の気持ちでいっぱいである。

4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

まずはカンボジアをきっかけに、「国際協力」「援助」について焦点をあてて授業を行っていく。そこで歴史背景、現地で働く人や相手国とのつながりに触れることで、色々な視点から考えられるようにしたい。

また「知識を得たいから学校に行く」と目を輝かせて、アンケートに答えてくれたカンボジアの児童（生徒）のように、『学ぶ楽しさや喜び』を感じられる授業展開を目指し、私自身が日々研鑽していきたい。

5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

観光では訪れることの出来ない場所に行き、そして通訳を介して現地の方に細かい部分まで話を聞くことができ、本当に貴重な経験をさせていただいた。研修場所に加え、バスの移動中に見たり聞いたりしたことも多く、日本では知り得なかったことや感じられないこともあった。

また、カンボジアのことだけではなく、日本を外から見つめ直す良い機会となった。我が国は戦後60数年、戦争等がないことがいかに素晴らしいことかを改めて感じた。しかし反面、「どうして学校に行くのか。」という質問に対して「義務教育だから。」という答えが多かった本校の中学生。「学ぶ」喜びよりも、「学ばされている」感が強いこと、そしてまた人間関係の希薄さが浮き彫りになっている現状がある。

研修を通して、色々と考えさせられることも多かったが、その度ごとに同じ参加者の方と話をすることで、また別の視点で物事を見ることが出来たのも大変良かった。

事前研修も含め、大変充実していた。よりよくするための提案としては、過去に参加された方と前日でも充実していたが、もう少し事前に話ができると、より深く準備が出来たのではないかと思う。

6. その他、研修全般を通じての感想・意見など

事前研修でカンボジア国事情から、海外研修に際しての安全面、健康面まで JICA スタッフからアドバイスをいただいたお陰で、安心して参加することが出来た。

訪問した場所での学びは数えきれない程多い。母親への教育も行い、指導者が離れてもカンボジアの人たちが自分達で継続できるような内容を地道に続けている NGO 団体のスタッフの方々、全生徒の保護者に教育の大切さを伝えるために、1カ月60回をかけて保護者会を行ったワット・ポー小学校の先生方等現地で活躍している人々から直接話を伺えたことも私の財産である。知識や技術を教えるだけでなく、相手の心に響き、本当にその大切さや必要性を感じられるまでじっくりと丁寧に活動をされていた。軌道にのるまでには相当な苦勞があったのだと思う。現地の人々、そして現地で働く人々からもたくさん学ばせていただいた。

7. 今後の本研修参加者へのアドバイスなど

JICA スタッフとコーディネーターのもとで、事前にアンケートの内容や交流の流れについて話し合ったことが良かった。また、今年度に組み込まれた「振り返りの時間」は現地で感じたこと（嬉しかったこと、戸惑ったこと）をその日ごとに語り合えたことも大変有難かった。ぜひ次年度も継続できたらと思う。

そして何より参加者は学期末の仕事や部活動等で、忙しい時期なので、体調には十分に気を付けて出発し、現地で悔いの残らない活動をしてほしい。

8. 各訪問先等の所感

日時	テーマ	所感
7月26日 (火)	日本からカンボジアまでの移動中および現地到着	プノンペンに到着した時、想像していた以上に建物が立派で美しい街並みが目に入ってきた。しかし移動中のバスの中からみた光景（3人乗りのバイク、信号の少なさ、物売りの子供、道路を横断する人の多さ）に驚いた。
7月27日 (水)	JICA カンボジア事務所表敬	「地雷」「内戦」「貧困」というネガティブなイメージでカンボジアを作り上げている自分に気づかされた。勿論、教育の問題（中学校に進学する子供は全体の34パーセントという数字の低さには驚いた。）、電化率の低さ、クメール・ルージュの支配や内戦による負の遺産など諸問題があることは事実

		<p>である。地雷での死亡率よりも、交通事故での死亡率が高いこと、識字率の上昇や多くのドナーの援助を受けながら復興・開発が進んでいることを知り、カンボジアをネガティブなイメージでまとめることは出来ないと感じ始めた。</p>
7月27日 (水)	市内見学（現地マーケット視察）	<p>日本も含め海外の品物も多く揃っていた。文房具屋さんでは、現地の地図や教科書もあり、早速教科書と中学生に人気のある雑誌を購入。クラスの生徒たちの反応が楽しみである。</p> <p>セントラルマーケットでは、商品の並べ方や商品の多さに驚いた。また新鮮な食材が豊富だと感じた。生まれて初めて食べたドリアンは忘れられない味であった。</p>
7月27日 (水)	JICA 無償資金援助で建設された施設	<p>船上からの見学だからこそ、建設された橋の全体を見ることができた。日本の技術力の高さと支援する意味を知ることができた。橋の美しさとは対照的に水上に密集して建てられた家に違和感を覚えた。</p>
7月27日 (水)	本日の振り返り	<p>内容の濃い2日目となった。内容が濃すぎる分だけ、考えさせられる事も多かった。プノンペンの都会化とマーケットの商品の多さに驚き、車窓でみた所謂スラム街の現実を目の当たりにした時の複雑な気持ちは皆同じであった。記録として写真を撮るべきなのかどうか…その悩みや葛藤を共有できて良かった。撮られている相手側に立った時に撮影することに苦しさを感じる。はっきりとした結論は出ないままだが、自分なりにには事実は事実として残しておこうと思う。それは決して興味本位で安易な気持ちではない。美しく明るいカンボジアも多いが決してそれがすべてでもない。逆にゴミが散乱する中で生活する人々がカンボジアでもない…。悩んだ資料については、日本の生徒の実態に応じて変えていこうと思う。</p>
7月28日 (木)	カンボジア日本人材開発センター	<p>カンボジアの市場経済を促進すること、そしてカンボジアと日本の相互理解を深めていくことを目的に、大きく3つの活動が行われている。これからのカンボジアを支えていく若い学生たちの日本語への学習意欲の高さと、将来への夢や希望を知り、素直に嬉しいと感じた。</p>
7月28日 (木)	本日の振り返り	<p>副業をして生計を立てなければならぬほど、教師の給与は良いとは言えない。そのことを知りながらも、教育が大切であることを理解し、教師を夢に掲げている学生の話に感動した。同時に今の日本の学生はどうなのか…ふと日本の学生とカンボジアの学生を比較していた自分がいた。</p>
7月29日 (金)	国際保健協力市民の会(SHARE)	<p>子供の健康を守るために、コミュニティぐるみで保健活動を行っている団体。子供の健康を守るために、SHAREスタッフのみが活動を行っているのではなく、地域の人々が中心にそして持続可能な支援が出来るように、村長を呼んで教育を行っている様子を実際に見ることができた。NGOが離れても続けられるような内容にしている、という話が印象的である。</p>
7月29日 (金)	夕食（影絵）	<p>影絵が見られるレストランで夕食。演奏、歌もすべて生であったことに驚いた。影絵では関節の動きなど細かいところまで工夫がされていた。</p>
7月30日 (土)	アンコールワット	<p>世界遺産であるアンコールワットを初めて見た。過去の遺産の凄さに驚いた。完全に観光客気分写真撮影に夢中になっていた。壁面にはさまざまな絵が描かれており、中でも「天国と地獄」は日本人の私達にも理解しやすい物語となっていた。</p>

7月30日 (土)	クメール伝統織物研究所 (IKTT)	<p>元京都の友禅染職人をされていた森本さんが、カンボジア伝統の織物の復興を成し遂げた村。6年前に、家計が苦しいため中学校をやめてこの村に来たと話してくれた女の子にも出会った。ここでは、働くだけではなく、生活の場や子供たちのための学校まで存在する。</p> <p>私達は子供たちにアンケートをとったり、森本さんに直接話を伺うことができた。「伝統は守るのではない。作るものだ。伝統を守ろうとするから無理がでたり、消えてしまうものもある。固定してしまうと後ろ向きになる。そうではなく、時代とともに伝統を生かしていくことが大事だ。」とおっしゃっていた言葉が、何事にも前向きに取り組んでいる森本さんの姿と重なった。</p>
7月31日 (日)	(朝) 昨日までの振り返り	IKTT とでの生活スタイルは、日本の昭和を思い出させるものであった。大量生産、大量消費の日本とは違い、すべて手作業で行っているすばらしさを知った。そして何でも自分の手で作る (ちょうど村の男性が家を作っていた) ことの大切さを感じた。
7月31日 (日)	クメール伝統織物研究所 (IKTT)	村の人々はとても温かく、朝の食事、洗濯風景まで見せてくださった。雨水を貯めていたり、大きなタライで洗濯物をする姿など、かつて昭和の日本について学んだ時の風景を思い出した。また、村に生えている花を摘んで花束にしてプレゼントしてくれた女の子がいた。とても恥ずかしがり屋で、はみ噛みながら私の所に持ってきてくれたことが忘れられない。
7月31日 (日)	アンコールワット	タ・プロームの見学をした。巨大に成長した木に押しつぶされながらも、かろうじて寺院が残っている状態。自然の驚異を感じたと同時にどこか神秘的な雰囲気も感じた。
7月31日 (日)	夕食 (アプサラダンス)	食事をしながら、伝統的な踊りであるアプサラダンスを目の前で見ることができた。ポルポト政権時代に踊りの先生や生徒の90%もの人が処刑の対象となり、振り付けなど記録された書物もほとんど消失したと言われている踊りの復活は、是非とも自分の目で見てみたいと思っていたので感激であった。衣装の美しさに加え、ゆったりとしなやかに動く手足が印象的であった。
8月1日 (月)	カンボジア地雷対策センター博物館	バスが入口に入っただけで、無残な車の姿が目に入った。さまざまな形や大きさの地雷を目の前に係の方の話聞くのは何とも言えない悲しい気持ちになった。なぜそこまでしなくてはならなかったのか? そんな気持ちでいっぱいであった。
8月1日 (月)	海外ボランティア視察 (伊藤 SV, 徳富 JV)	カンボジアには戸籍はあるが、住民登録がないので日本のように就学通知書があるわけではなく、子供たちの人数把握が難しいとのこと。落第、留年者の課題がなお残っている。伊藤 SV の話から、教育の根本から改善が必要だと感じ取れた。数字が具体的に示されているだけに、もどかしさを感じるばかりだった。
8月1日 (月)	母親教室 (就学前教育)	母親教室であったが、今回は小さな子供たちがたくさん集まっていた。歯ブラシを配布し、歯磨き指導であった。ゆっくり、丁寧に母親そして子供たちに歯磨きの仕方を指導していた。実際に子供の歯をみせてもらうと、素人の私でもわかるほどの虫歯が多い子供もいたし、同時に母親に話を聞くと、「歯磨きをしているが、夜は気持ち悪くなるので私も家族も歯磨きをしていません。」という母親もいた。歯磨きの大切さなど日本では当たり前のようだが、

		<p>それが当たり前ではないのだと学んだ。</p> <p>校長先生のご配慮で、近くの学校を見せていただくことができた。そこがまた、テレビ番組を通して建築された学校でもあり、少し身近な感じがした。教室に飲み水の濾過器があり、子供たちが過ごしやすい環境づくりに心がけていた。</p>
8月1日 (月)	夜間の識字教室	<p>今回偶然にも子供が多く集まっていた。大人対象の本なので、テーマが難しいにもかかわらず、子供たちが一生懸命に学んでいた。中には日本の中学生を思い出させるような腰パンの男の子や、先生が前で説明をしている時に、いたづらをしたり笑ったり…子供はみんな同じだなと思った。</p>
8月1日 (月)	本日の振り返り	<p>次の日のワットポー小学校での打ち合わせを行った。</p>
8月2日 (火)	ワット・ポー小学校	<p>子供たちの一生懸命に演奏する姿に感動した。この感動を日本の生徒にも、先生方にも絶対に伝えたいと思う。指導者の一人である、田中先生の話の伺い、制服を着て靴も履いている子供たち。一見いわゆるエリート学校にも見えるが、実際には制服も買えない家庭があったり、自宅に帰ったら大切な制服を脱ぎ、裸で過ごしている子供もいるとのこと。全生徒の保護者に教育の大切さを伝えるために、1カ月60回をかけて保護者会を行った事実を知り、この学校の活気とドロップアウトの少なさの背景には相当な苦労があったのだと思う。また、支援に頼り切らず、『自分達の手で、自分達の未来を』をモットーに取り組んでおられる先生方は本当に素晴らしいと感じた。</p>
8月2日 (火)	コン・ボーン氏の講演	<p>ポルポト政権時代に、日本の神奈川県に亡命して日本で働き、退職後にカンボジアに戻り、学校を設立。「私は命ある限り、教育を支えています。」という言葉が忘れられない。過去の事実を伝え、未来を創り上げようとしている姿に感銘を受けた。</p>
8月2日 (火)	本日の振り返り	<p>許しあい、理解し合うことの大切さを知った。これはどの人たちにも大切なことではないか…。また時代とともに消えたり、自分達に都合のいいようにしないよう、私たち自身も歴史をしっかりと学び、事実を伝えていきたい。</p>
8月3日 (水)	現地マーケット視察（ロシアンマーケット）	<p>商品の並べ方、同じ商品を隣同士で売る風景に違和感を覚えなくなってきた。それがカンボジアなのだ…。マーケットには、文具、衣類、食事などすべて揃う感じがする。朝が早かったからか、先日行ったセントラルマーケットより活気が少なく感じた。</p>
8月3日 (水)	トゥールスレン虐殺博物館	<p>事前に本や話から覚悟をして博物館に入った。自分に出来ることは、目を背けるのではなく、事実を伝えることだと言い聞かせて…。ベッドや写真、頭がい骨を目の前にして正直この場から逃げ出したいという気持ちにもなった。けれども、写真に写っていた人たちのことを考えると…。二度と繰り返してほしくない。建物の中には来場者からのメッセージが残されており、みな同じことを願っていた。この博物館が平和へのメッセージなのだ。</p>
8月3日 (水)	JICA カンボジア事務所 研修報告会	<p>この研修が終わりなのだと思うと、研修で出会った人や景色が思い出された。相手のことを考えた「自立」に向けての継続的な支援の大切さ、教育の重要性、そして悲しい事実を受け入れ、前向きによりよい方向へ導くことの必要性等を学ばせていただいた。</p>
8月3日	本日の振り返り	<p>カンボジアの子供たちに出会った後に、いつも同じ参加者の先生方と日本の</p>

(水)		<p>子供たちの話題になった。日本とカンボジアの子供たちの同じところに微笑んだり、違い（ドロップアウトの現実など）にもどかしさを感じたり…。</p> <p>今回の先生方のコメントはしっかりと記憶しておきたい。</p>
8月4日 (木)	カンボジアから日本までの移動中および日本到着	<p>日本に戻って生徒や同僚の先生に伝えたいことはたくさんある。まずは膨大な資料を整理してから、焦点がずれないように進めていこうと思う。</p> <p>今回の研修でたくさんの人と出会えたことが何よりも嬉しかった。この出会いを大切にして、日本の生徒達そして自分自身の生活に生かしていきたい。</p>